

一九九五年度国文学会彙報

一九九五年度国文学会活動状況

△新入生歓迎会▽ 四月五日 新島会館 学生部会主催

△国文学会総会、研究発表会▽ 六月一日 至誠館会議室

・総会

・研究発表会

漫画から物語へ―視覚教材を使つて

巽康真（同志社中学校教諭）

朱雀院の詠歌―若菜上巻から横笛巻まで

桑原もと子（本学大学院博士課程後期課程）

微用作家海野十三―「虚構」世界の変容

吉川麻里（本学大学院博士課程前期課程）

昭和十年前後の「偶然」論―中川與一「偶然文学論」を中心

真銅正宏（本学助教）

△講演会▽ 一二月九日 明德館M1教室 学生会主催

古代史における作家の想像力―卑弥呼と聖徳太子を中心に  
黒石重吾（作家）

△同志社国文学▽

第四三号 一九九六年一月三〇日発行

第四四号 一九九六年三月二〇日発行

△国文学会会報▽ 第二三号 一九九六年三月二〇日発行

一九九五年度 卒業論文題目

『古事記』に於ける大國主神話

森 真

万葉における自然観

高橋 宗元

―「やど」の景物―

『万葉集』における夢

河村 恵美

『万葉集』の吉野歌について

小野 真紀子

―巻七・九を中心に―

大津皇子・大伯皇女

金田 真理

―仮託説の検証と実作説の可能性―

『山上臣憶良七夕十二首』についての考察

鬼頭 正恭

憶良作品にみられる文学意識

堀本 恵子

―天平五年六月の三部作を中心に―

柿本人麻呂の羈旅歌人首

砂田 幸秀

―人麻呂の意図の有無―

神亀二年十月難波宮行幸従駕歌について

垣見 修司

―笠金村作歌を中心に―

高橋虫麻呂の浦島子歌の考察

磯井 淳平

高橋虫麻呂「見河内大橋獨去娘子歌」の考察

松井 崇典

「生きて、動く」歌

坂部 博恵

―「乞食者詠二首」を中心に―

大伴家持「為幸行芳野離宮之時儲作歌」の論  
荻野 淳士

防人の心情を対象とする大伴家持の長歌三作詠作の意図

寛 純子

「七夕伝説」の上代文学への表れ

千葉 佐和

「伊勢物語」地名考

松浦 由美

「源氏物語」の一世源氏

静観 太郎

光君の位置

田中 葉子

紫の上の女性像

草間 容子

「源氏物語」和歌考

吉岡 潤

「源氏物語」の地名

福嶋 浩子

「京」と「都」を中心に

高橋 辛亥

「源氏物語」の女三の宮考

桂 由美子

物語と歴史の間

平 美登里

「大鏡」怪異考

安藤 愛子

「大鏡」における道長像

中 喜亮

「江談抄」吉備真備考

澤 祥規

陰陽道、その呪術的側面の変遷

松田 万貴子

説話文学を題材として

増子 めぐみ

夢の様相

松田 万貴子

古代・中世の説話を通して

金澤 祥規

「今昔物語集」卷二十七本朝付靈鬼の編集意図

昔男の系譜

布施 多佳子

「今昔物語集」についての一考察

今田 依子

天狗の変遷

浅田 早和子

「今昔物語集」と太平記を中心に

千葉 久美

中世の目から見た小町像

深原 優子

「小町草紙」を中心に

高松 優子

「宇治拾遺物語」の場

馬場 亜未子

「とはすがたり」における二条と出家

井上 佳子

「清水冠者物語」の成立と発展

新宅 俊夫

「平家物語」における「修因感果」の理法

木元 奈穂

上皇と熊野御幸

橋詰 知幸

平家物語「横笛説話」からの考察

小川 奈津子

英雄源九郎義経

倉橋 和代

「悲劇の人物像と伝説」

増子 めぐみ

「平家物語」にみる木曾義仲について

松田 万貴子

「酒吞童子」にみる対立の構図

松田 万貴子

京都北山、惟喬親王の史跡と伝承

松田 万貴子

平家物語における平宗盛の人物像と役割

松田 万貴子

『平家物語』における宝剣喪失の受けとめ方

——長門本『源平盛衰記』を中心に——

東井三代子

平家物語「先帝身投」の一考察

——諸本の比較検討を中心に——

西村弥生

初期草双紙嫁入物の流れ

——構図から見た「嫁入物」の世界——

石井知子

『雷の四季咄』と『おにの四季あそび』の絵本分類上の位置について

宮田育子

『曾根崎心中』観音めぐり

——その存在意義について——

水野克幸

『曾根崎心中』論

——「観音廻り」の存在

大野清信

『曾根崎心中』成功の必然性

門田力

『根南志具佐』試論

——戯作者・源内の手法——

西尾勝彦

『平賀張り』とは何か

——『根南志具佐』にみるその特色——

富田晋一郎

『雨月物語』における怪異

『浮世風呂』が落語に与えた影響

劇書からみる歌舞伎演出

——「四谷怪談」を中心に——

全美星

野口良子

水野順子

「お柳子別れ」の演出とその意義

——『祇園女御九重錦』における「子別れ」の位置——

鈴木むつみ

近世庶民教育創成期における『寺子訓誨之式目』の役割

井筒照美

『高野聖』の世界

——現世と異界——

木村通

山村暮鳥の詩風

——初期詩篇を中心として——

小林美奈

『草枕』論 その制作意図を中心として

——画工＝漱石か——

田中利佳

『「ころ」』の悲劇

「明暗」論

萩原綾乃

北原白秋論

——国策協力的作品への道程——

和田さやか

和解

——現実から芸術への文学化——

巳波忠大

「地獄変」論

——新聞小説としての考察——

高木雄一郎

尾崎翠の感情の表現

——「初期作品集」をめぐって——

平野静香

尾崎翠「第七官界彷徨」の世界

——大正・昭和の思想、風俗の影響——

桑野裕子

宮沢賢治「貝の火」論

秋山 桂子

野溝七生子 純粹少女の希求論

山 際 愛 貴

——「山柵」「女獣心理」を中心に——

遠藤周作論

荒 井 英 恵

横光利一「病妻もの」論

塩 山 素 康

——外面から内面へ——

——達成点・「深い河」——

稲 田 香 雪

横光利一「高架線」論

白 石 賢 一

——形式主義の視点から——

安野光雅の考える科学精神

小 松 著 子

『雪国』と川端康成

辻 原 由 紀 子

——構想の変化を追って——

——「天動説の絵本」を中心として——

鳥 見 泰 子

石川淳

重 富 史 子

——方法論としての処女作「佳人」——

向田邦子の家族像と目線

高 嶋 克 史

三島由紀夫「真夏の死」考

木 谷 真 紀 子

——三島文学における「真夏の死」の位置——

——「当り屋ケンちゃん」に見られる「言葉への不

信」と「子供」——

三島由紀夫の「密室」

中 川 紀 子

——『金閣寺』を中心に——

上代における身体語彙

大 槻 美 恵 子

原爆文学と「黒い雨」

今 庄 智 樹

藤枝静男、『欣求浄土』論

梅 原 明 史

——無調の私小説——

韓国語と日本語の敬語に関する考察

朴 宣 姫

遠藤周作が「沈黙」で提言したもの

木 村 光 輝

——悪と救い——

ことわざ論考

高 見 志 乃

——『スキヤンダル』から『深い河』へ——

芦 田 淳 子

法律文の難解さについて

久 保 征 美

——「沈黙」で提言したもの

——意識と使用言語形式との関係——

連想語に見る文化

辻 村 和 子

——悪と救い——

——句読点の使用実態調査——

文節数と直前の単語に注目して

北 村 幸 子

——『スキヤンダル』から『深い河』へ——

石 川 千 里

——意識と使用言語形式との関係——

石 川 千 里

——意識と使用言語形式との関係——

石 川 千 里

曖昧な日本語の是非

—— 外来語の日本語化 ——

木原美南

現代日本語における外来語の語形について

橋本和佳

現代日本語のタブー、ハレ言葉と英語との比較

バットン・ニコル

マンガのオノマトペ

—— その使用実態調査報告 ——

岩井彩子

現代の女性雑誌における文末表現の比較

小林祥子

いわゆる「ら抜き言葉」についての考察

清水環

—— 助動詞「れる・られる」や可能表現の使われ方を

通して ——

一九九五年度修士論文題目

男色文学としての「菊花の約」論

仁井洋子

中日戯曲における異類婚姻譚

呉艶

—— 『白蛇伝』と『娘道成寺』と『芦屋道満大内鑑』  
をめぐって ——

ラペーニャ・ボニファシオの「シーサの旅路」ラゲーナ  
における能

ウマリ・アノパノ・アデリナ

—— 外国人劇作家に対する能の影響のケーススタディ ——

葉山嘉樹論

レッキー・リチャード

—— 『海に生くる人々』からの展開 ——

戦時下の海野十三

—— 「科学力」の陥穽 ——

吉川麻里

「よさうだ」の語義・用法

—— 「比況」用法を中心に ——

茨木伸介

人称代名詞「彼」「彼女」の語義と用法につい

て

孫栄美

投稿規定

国文学会機関誌「同志社国文学」は、会員諸氏の研究発表の場でありますから、進んでご投稿ください。枚数は四百字詰三十枚以内。次号の締切は一九九六年九月末日厳守。ただし、掲載論文には限度がありますので、論文の採択は編集委員会に一任してください。